

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：32102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2020

課題番号：15K03860

研究課題名（和文）日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究

研究課題名（英文）An International Comparative Study of Mutual Help Networks between Japan and Southeast Asia from the Viewpoint of Folk Sociology

研究代表者

恩田 守雄（Onda, Morio）

流通経済大学・社会学部・教授

研究者番号：00254897

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本の田植えの労力交換のユイ、共同作業などのモヤイ、冠婚葬祭のテツダイの慣行が東南アジアにも存在する。フィリピンでは相互扶助のバヤニハンからユイに当たるスユアン、金融互助のバルワガンがある。インドネシア東ジャワではゴトン・ロヨンの相互扶助が顕著で日本の隣組の組織が機能し、バリ島ではユイとしてサリン・ツルンガン、庶民金融のアリサンがある。タイではナムチャイ（思いやり）からローンケーク（労力交換）がされ、小口金融のシェアがあるが少数民族ではない。マレーシアではユイ組の稲刈り組織、金融互助ではドット・ウンディがあり、サバ州イラヌン族では米作手助けのザリウアが見られる。これらは地方では健在である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

互助行為について日本と東南アジア（フィリピン、インドネシア、タイ、マレーシア）との国際比較によってその類似と相違から個々の互助ネットワークを明らかにし、互助制度が共通に見られる普遍性及び国や地域による差異が表れる固有性の社会構造を解明する点、またその制度の相互浸透による影響に着目する「社会的移出入」の仮説を検証する点で、さらに各国互助社会の通底にある共通の構造から「東南アジア的互助社会」を考察する点で、これまでにない先駆的な研究として学術的意義をもつと思われる。なお一般の人々に向けては、改めて人と人とのつながりや絆について考える契機を与える意味で社会的意義を有するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The action of mutual help as a spontaneous social order is divided into three types. One is reciprocity in helping to plant rice by exchanging labor. The second is redistribution. In exchange for the right to get goods from a common store, local people have the obligation to maintain common-pool resources. Finally, unidirectional help refers to support in funeral and wedding ceremonies requiring no monetary exchange. This study discusses the results of interview survey and fact-finding fieldwork, and explores both the commonalities and differences between Japan and Southeast Asia. They have similar patterns of mutual help action. While some customs have almost disappeared, they can still be clearly identified. One of them is micro finance. The invested money is small and managed by members and the way is characterized through nationalities and religions. The study concludes that modern societies might do well to reconsider mutual help in search of ways of reconstructing communities.

研究分野：社会学

キーワード：互助ネットワーク 互酬的行為 再分配的行為 支援（援助）的行為 集団主義と個人主義 互助制度の社会的移出入 東南アジア的互助社会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

研究成果報告内容 (様式C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 <共通 >)

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ

東アジアの韓国などの互助慣行(労力交換のプマシ、金融互助のケ<契>など)についての研究はあっても(鈴木,1958)、東南アジアではインドネシアなどの小口金融以外(Geertz,1962)の文献はほとんどない。また何故互助行為に日本との類似と相違があるのかという点が明らかにされていない。欧米では、ダーウィンの『種の起源』(1859)の淘汰説に対し欧州の互助慣行に着目したクロボトキンの『相互扶助論』(1902)以来互助社会の研究は少ない。さらに国や地域の互助制度を比較することでその相互関係から「社会的移出入」に着目し、「東南アジア的互助社会」を考察する視点は皆無である。本研究は東南アジアの互助制度の国際比較をする先導的な役割を果たす位置にある。*鈴木榮太郎「朝鮮の契とプマシ」『民族学研究』27(3): Geertz, C. "The Rotating Credit Association," *Economic Development and Cultural Change* (10).

(2) 本研究の着想に至った経緯及び研究成果の発展

これまで科研費研究では、社会的要因が経済発展に作用する過程を著書『発展の経済社会学』(1997年、文眞堂)で明らかにし、社会開発の重要性を『開発社会学』(2001年、ミネルヴァ書房)で指摘した。特に固有の社会構造を活かす社会開発が自立した発展をもたらすという結論によって、互助ネットワークの存在を浮き彫りにした。日本の互助行為は『互助社会論』(2006年、世界思想社)で明らかにしたが、この研究過程で海外にも類似の互助制度があることを知り、日本との比較やその相互関係(制度の相互浸透、社会的移出入)に研究関心が傾いてきた。国内から東アジアの研究に進み、さらに東南アジアへと発展させたいという強い探求心が本研究着想の出発点にある。日本の互助制度との比較は単に海外の互助社会を明らかにするだけでなく、逆に日本固有の社会構造が明らかになり、東南アジア的特性が浮かび上がるものと思われる。

2. 研究の目的

(1) 互助行為(ネットワーク)の国際比較 日本と東南アジア

これまで「自生的な社会秩序」に研究関心があり、その代表的な行為として相互扶助に注目してきた。本研究は日本の伝統的な互助行為である田植えや屋根葺きの労力交換などのユイ(互酬的行為)、道路整備や共有地(コモンズ)の維持管理などのモヤイ(再分配的行為)、冠婚葬祭の助け合いなどのテツダイ(支援<援助>的行為)を通して、東南アジア諸国の互助行為を日本と比較し、その共通点と相違点を整理しながら個々の国や地域固有の互助ネットワークを明らかにすることが目的の一つである。相互扶助は行為の志向性から類型化できるが、その表れ方は個々の社会構造により異なる。本研究はこれまで調査した韓国、中国、台湾から、さらに範囲を広げ東南アジアではフィリピン、インドネシア、タイ、マレーシアの互助ネットワークを取り上げ、関連地域としてかつて日本が統治した南洋群島も視野に入れる。なお引き続き日本でもシマ社会の原型として島嶼地域を中心に調査を継続する。

(2) 互助制度の普遍性と固有性の構造解明と「社会的移出入」(制度の相互浸透)の仮説検証

アジアの互助制度には労力交換で韓国のプマシ(結)、中国と台湾のファンゴン(換工)、ベトナムのドイコン、小口金融では韓国のケ(契)、中国のホォフェイ(合会)、台湾のピュアフェイ(標会)があり、東南アジアではベトナムのホイ、互助組織で日本の隣保に似たベトナムのリンザーやインドネシアバリ島のスバック、タイのクム(組)などがある。二つ目の目的は互助制度がどの国や地域にも共通の普遍的な形態がある一方異なる態様があるため、この類似と差異の関係について解明する。互助制度が移出や移入された「社会的移出入」と土着制度との融合(制度の相互浸透)という動的な関係にも着目し、農村に加え都市では旧日本人町を調査する。中国の朱子が唱えた非常時備蓄の「義倉」(社倉)の制度はベトナムや日本に波及した。この「共生移転」に対しフィリピンやインドネシアでは日本統治の「隣組」の「強制移転」の可能性(自生的互助制度の変容)も否定できない。この点日本が委任統治した南洋諸島の互助慣行も調査する。

(3) 「東南アジア的互助社会」の構造原理の抽出と「東南アジア共同体」構想の可能性

互助制度が内発的発展を導く点にも着目する本研究は、日本の近隣諸国においてその独自(自律)性を持ちながらも同種の互助慣行が見られることから、東南アジア固有の「互助社会」の構造原理の抽出を三番目の目的としている。本研究ではフィリピンやインドネシア、タイ、マレーシアなど東南アジア諸国に共通する互助行為(ネットワーク)と互助制度から「東南アジア的互助社会」を考え、さらに広く「東南アジア共同体」構想につながる基礎研究として位置づけている。岡倉天心は『東洋の理想』(1903年)で「アジアは一つである」としたが、「東南アジア共同体」は政治や経済の面だけでなく、共通の互助制度と互助精神からも支えられるものであろう。

3. 研究の方法

(1) 研究計画

[年度別研究目標]

<共通> 日本との互助行為の比較分析及び各国の互助制度の普遍性と固有性の解明

互助制度関連の文献精読、植民地期資料の収集と分析、現地(聞き取り)調査

<平成27(2015)年度> 日本とフィリピンの互助行為及び制度の比較

- <平成 28(2016)年度> 日本とインドネシアの互助行為及び制度の比較
- <平成 29(2017)年度> 日本とタイの互助行為及び制度の比較
- <平成 30(2018)年度> 日本と南洋群島(パラオ、ポンペイ)の互助行為及び制度の比較
- <平成 31(2019)年度> 日本とマレーシアの互助行為及び制度の比較
期間全体のまとめとして互助制度の「社会的移出入」の検討
「東南アジア的互助社会」の分析と「東南アジア共同体」の可能性検討

(2) 研究方法

文献調査 国内外の文献精読

- ・民俗学及び社会学関連の学術書の精読 ・植民地期資料の収集と分析
- ・各国(地域)別文献

フィリピン

- ・Steinberg, David J. 2000. The Philippines: A Singlar and a Plural Place (Forth edition). Boulder, CO: Westview Press. 堀芳恵枝・石井正子・辰巳頼子訳, 2000 『フィリピンの歴史・文化・社会』明石書店。他

インドネシア

- ・足立真理, 2016 「現在インドネシアにおけるザカート実践の多様性とその管理の二形態」『イスラーム世界研究』第9巻 265 - 273 頁。
- ・井筒俊彦訳, [1957, 1964] 2009 『コーラン』(上), [1958, 1964] 岩波書店。
- ・Kailani, Muhammad Iqbal. 1998. The Book of Zakat (Precepts dealing with Poor-Due), rendered into English by A.K. Murtaza, Riyadh, Saudi Arabia: Darussalam.
- ・Kodiran. 1971. Budaya Jawa. In Koentjaraningrat (Ed.), Manusia dan Kebudayaan di Indonesia. Jakarta: Djambatan. 「ジャワの文化」加藤剛・土屋健治・白石隆訳, 1980 『インドネシアの諸民族と文化』めこん。

タイ

- ・Embree, J.F. 1950. Thailand: A Loosely Structured Social System, American Anthropologist, 52 (2): 181-193.
- ・Kaufman, H. 1960. Bangkok-A Community Study in Thailand. New York: Augustin Incorporated Publisher.
- ・北野淳, 1990a. 『タイ農村社会論』勁草書房。1990b. 「開拓社会の成立」『講座東南アジア学』(坪内良博編, 東南アジアの社会, 第3巻) 弘文社, 71 - 99 頁。
- ・水野浩一, 1981. 『タイ農村の社会組織』創文社。
- ・佐藤康行, 2009 『タイ農村の村落形成と生活協同』めこん。

南洋群島

- ・岩生成一, 2014 『続南洋日本人町の研究 南洋島嶼地域分散日本人移民の生活と活動』岩波書店。
- ・神谷忠孝, 1991 「『南洋』神話の形成」『東南アジアと日本』(講座東南アジア学10) 矢野暢編, 弘文堂, 49 - 63 頁。
- ・丸山義二, 1942 『南洋群島』大都書房。
- ・森下正明, 1944 「島民」『ポナペ島 生態学的研究』今西錦司編, 彰考書院, 123 - 314 頁。
- ・南洋廳編, 1939 『南洋群島に於ける舊俗慣習』南洋廳。
- ・南洋庁編, 1939 『南洋群島要覧』(昭和14年版) 南洋庁。
- ・能仲文夫, 1934 『赤道を背にして』中央情報社(1990, 小菅輝雄編, 南洋群島協会)。
- ・鈴木経勲, 1944 『南洋風物誌』日本講演協会。
- ・今西錦司編, 1944 『ポナペ島 生態学的研究』彰考書院。
- ・吉野作造, 1915 『南洋』(徳富猪一郎監修) 民友社。他

マレーシア

- ・口羽益生, 坪内良博, 前田成文編, 1976 『マレー農村の研究』創文社。
- ・前田成文, 1989 『東南アジアの組織原理』(東南アジア学選書12) 勁草書房。
- ・Syed Husin Ali (ed.), 1984. Kaum, Kelas dan Pembangunan Malaysia-Ethnicity, Class, and Development, Malaysia. Persatuan Sains Sosial Malaysia. 小野沢純・吉田典巧訳, 1994 『マレーシア～多民族社会の構造』井村文化事業社。
- ・立本成文, 1989 『東南アジアの組織原理』勁草書房。1996 『地域研究の問題と方法 社会文化生態力学の試み』京都大学学術出版会。
- ・Zianal Kling (ed.), 1977. Masyarakat Melayu: Antara Tradisi dan Perubahan. Kuala Lumpur: Utusan Publicistgions & Distributions. 鈴木佑司訳, 1981 『マレーシアの社会と文化 マレー人の伝統と近代化』井村文化事業社。
- ・山本博之, 2006 『脱植民地化とナショナリズム』東京大学出版会。

現地調査 聞き取り(インタビュー) 調査と海外の互助関連資料の収集

- フィリピン 2015年8月 ミンダナオ島(ダバオ)、サマル島、ルソン島(ブラカン州、パンパンガ州)の農村、漁村
- 2016年3月 ルソン島(ベンゲット州、アルバイ州、南カマリネス州)、パナイ島、ギマラス島の農村、漁村、山村

インドネシア 2016年8月 東ジャワ(マドゥーラ島、シドアルジョ、マラン)の農村、漁村
2017年3月 バリ島(ギャニャール県、クランクン県、タバナン県)
タイ 2017年8月 東北部コンケン近郊の農村、北部チェンマイ近郊の山村
2018年3月 北部チェンライ県メーサイ郡のアカ族山村、チェンセーン郡の農村、
少数民族(雲南族、アカ族、ラフ族、ルア族、タイヤイ族)共生の山村
南洋群島 2018年8月 パラオ諸島(共和国)の農村、漁村
2019年3月 ポンペイ島(ミクロネシア連邦)の農村、漁村
マレーシア 2019年8月 半島マレーシアのムラカ(マラッカ)州の農村、漁村
*新型コロナウイルスの感染拡大に伴い現地調査ができず研究期間を1年延長。
2020年11月、12月 引き続き新型コロナウイルスの感染拡大により現地調査ができない
ため、現地とのオンライン・インタビュー調査を実施。東マレーシア
のサバ州(イラヌン族)とサラワク州(マレー人)の農村、漁村

4. 研究成果

(1) フィリピンの互助慣行

フィリピンでは、日本のユイに相当する *suyuan* (タガログ語) や *Iusong* (ビサヤ語)、*alluyon* (カンカナエ語)、*aduyon* (イバロイ語) などの言葉が野菜の種まきや収穫で使われてきたが、若い人がこれらの言葉を使うことが少ないのは日本も同じである。モヤイでは共同作業で *tulongan* (タガログ語) や *makipagbisug* (ビサヤ語)、*manbibindang* (カンカナエ語)、*mantitudong* (イバロイ語)、*rabus* (ビコル語) などが使われる。住民総出の作業は少なくボランティアとして行われる場合が多いが、山村では誰でも共同作業に加わる点で団結力は強い。作業に参加しないときの過怠金は一部で見られた。金銭モヤイ(小口金融)の *paluwagan* (*paluwagan*) は *buboay* (ビサヤ語) と言うところもあるが、調査地域では共通の言葉が使われている。しかし持ち逃げがあり管理が十分でないためやめたところが多かった。その仕組みは都市では利息目的の日本の頼母子(無尽)に近似するものもあるが、地方では共済目的の積み立てが多く分配を均等にする方式が見られる。テツダイでは見返りを期待しない *tulong* (タガログ語) や *tabang* (ビサヤ語) の手助けの行為に加え、葬儀では *abuloy* (タガログ語) や *dayong* (ビサヤ語) として弔慰金を出す。村落では相互扶助の *bayanihan* (*bayanihan*) に基づくつながりや絆が健在である。

(2) インドネシアの互助慣行

インドネシアの東ジャワでは、共同作業で *gugur gunung* (*gugur gunung*) や *kerja bakti* (*kerja bakti*)、冠婚葬祭の手助けでは *membantu* (*membantu*) や *menolong* (*menolong*) という言葉を使い、また日本の頼母子に相当する *arisan* (*arisan*) がある。バリ島では日本のユイにあたる *saling tulungan* (*saling tulungan*)、冠婚葬祭の手助けで葬儀の *medelokan* (*medelokan*) や婚儀の *meaban-aban* (*meaban-aban*) の言葉が使われ、小口金融では同様に *arisan* もある。おおむね互酬、再分配、支援(援助)の3分類に分けて互助行為を捉えることができる。東ジャワでは *gotong royong* (*gotong royong*)、バリ島では *saling metolongan* (*saling metolongan*) という言葉が相互扶助として言われる。末端の行政単位として *RT* (*Rukun Tetangga*) と *RW* (*Rukun Warga*) があるが、日本の隣組の遺制とも言える *RT* が近隣互助組織をつくり、さらにより大きな村組として *RW* を構成している。なおイスラム教では制度的な義務喜捨の *zakat* (*zakat*) と自発的な任意喜捨の *sadaqah* (*sadaqah*)、ヒンズー教では自由意志で寺院に寄付する *punja* (*punja*) があり、これらは不特定多数の貧困者を対象にした互助行為と言える。日本のユイに相当する行為は機械化でほとんど見られないが、生活の隅々まで浸透した宗教に基づく互助行為は強く、それは多様な喜捨に表れている。また金融互助では *coran* (*coran*) が禁じているため、利息をつけない *arisan* が共済と親睦の目的でされている。*arisan* を *coran* を読むために行う地域もあり、東アジアの入札式の小口金融とは異なる。

(3) タイの互助慣行

タイでは、タイ人の農村は日本のユイにあたる *ローンケーキ* (労力交換) が機械化により衰退しているが一部まだ見られる。チェンマイ近郊の山村では仏教の教えに基づく「開発僧」による農村開発が進められている。アカ族の山村ではケシからコーヒーへの転作で発展する一方伝統的な文化の継承が困難になっている。共同作業はどの村落でも見られ地域住民の一体感が維持されている。この村では金銭的支援としての *shua* (*shua*) は行われていない。もともと中国の「社」がタイの中産階級に普及し利息志向が強い。この点他の東南アジアとは性格が異なる。婚葬儀は *shua* (*shua*) という言葉で手助けがされ、少数民族では各出身地の生活様式が投影されている。その一方でタイ国籍取得の問題が少数民族の村落では大きく、全体としてタイ人の *National Identity* (*National Identity*) が *Ethnic Identity* (*Ethnic Identity*) に代わる面も否定できない。*gan-shua* (*gan-shua*) という相互扶助の言葉があり、*nam-chai* (*nam-chai*) の心が浸透している。困窮者への救済では協同組合(*sa-hoon*)の利用が多く、公助や自助への要請は急速に進む近代化の証左とも言える。調査した農村では共有地(*commons*)はほとんどないが、アカ族では保護森、収穫森、神聖森があり環境保全がされている。共同作業ではタイ人も少数民族もが参加の場合過怠金を科す点は日本と同じである。タイでは日本と異なり集団主義より個人志向も強いが、少数民族では自民族の共益を意識した互助ネットワークがまだ健在である。

(4) マレーシアの互助慣行

マレーシアでは、ムラカ州の農村は Tanaman Padi Berkelompok (Tanaman は収穫、Padi は米、Berkelompok は組の意味) という日本のユイ組にあたる 6 人から 7 人で稲刈りをする組織があったが、今は機械化や後継者不足からないところが多い。しかしまだ現存する農村もある。漁村では二人乗りの船で家族や友人で行うため、またココナツ農園でも日本のユイのような労力交換の慣行はない。モヤイにあたる共同作業(労力モヤイ) では、漁村でインドネシアと同じゴトン・ロヨン (gotong royong) の精神で漁民が年 3 回港の掃除などをする。他に河川の清掃関係では州レベルの組織がある。農村では共有地はないが、漁村では海岸や森は州の土地で勝手に木を伐採できない。墓地やモスクなどの清掃はボランティアであるため過怠金はない。日本の頼母子や無尽に相当する金銭モヤイでは金融互助の言葉として、年配の人が多く使うドゥット・ウンディ (duit undi の duit は金、undi は選ぶの意味) 若い人が使うドゥット・クトウ (duit kutu の kutu はダニ<血を吸う>の意味) があり、原則利息がつかない。支援(援助) 的行為としてテツダイでは葬儀で葬式組が活動し、婚儀では料理などの手助けをするルワング (rewang) という行為に基づく互助ネットワークが機能している。東マレーシアのサラワク州のマレー人村落では半島マレーシアと変わらないが、サバ州のイラヌン族はマレー文化を受容しているものの、ゴトン・ロヨンに対してミタバ・タバン (mitabang tabang) という相互扶助の言葉を使い、ザリウア (zaliuwa) という労力交換の慣行もあった。これは米を作るときだけ何か手助けをするという互酬性の義務を示す言葉でもある。またタタバ (tatabanga) という共同作業で使う言葉はその場にいることが大切で、地域住民の一体感が重視されている。

(5) その他 南洋群島の互助慣行

関連調査として、また次の研究の先行調査として互助慣行の「社会的移出入」の仮説検証のため、日本が統治した南洋群島のパラオとポンペイを調査した。両国(地域) の互助慣行は日本同様近代化の過程で衰退しているが、村落ではまだ伝統的な互助行為によるつながりや絆が見られる。特にパラオでは葬儀で故人の借金を親族のみならず地域住民が負担するという慣行 (omengkad el blals) があり互助ネットワークが機能している。パラオの農村では日本のユイにあたる直接の言葉は見当たらないが、近い言葉に mengerakl がある。土地が小さく家内労働で処理できるため互酬性はないが、この言葉は草刈りなどの共同作業で使われ、順番に集団単位で労働力を回していく日本のユイ組の作業に近似する。ポンペイではクミアイ (組合) という言葉で共同作業を行う。金銭的支援として小口金融のムシンがパラオとポンペイで普及しているが、これは日本人が伝えた無尽で利息を求めない相互扶助的な性格が強い。婚葬儀ではパラオは omadek で甲慰金を出し、ポンペイは sawas という言葉で喜怒哀楽をともしする。パラオでは klaingesu、ポンペイでは sawaspene という相互扶助の言葉があり、地域住民の一体感が維持されている。その一方で調査した農漁村では共有地が見られず共有意識は希薄である。困窮者への救済では公助や自助への要請が強くこれは急速に進む近代化の証左と言える。パラオでは海岸の清掃でキンロウホウシ (勤労奉仕) またポンペイでは共同作業で既述したクミアイという言葉が使われ、日本的な互助慣行が浸透していることがわかる。戦時下の強制労働の残滓とは言え、目上の人に対する礼儀や責任感の付与など日本の慣行が土着のそれに加わる二重構造を形成してきたが、戦後それらが従来の互助ネットワークに同化融合することで新たなコミュニティが生まれたように思われる。

(6) 東南アジアの互助社会 (東南アジア的互助社会) と「東南アジア共同体」

日本の互助慣行の「移出入」という点から調査したパラオとポンペイではムシン (ムシン) という言葉が使われ、これは日本人が統治した時期に伝えたものと推測されるが、東南アジア諸国ではこうした日本との接点は見られない。ただしインドネシアでは戦中の隣組が作られ、その規模は異なるものの、現在も隣保共助の末端の行政単位として機能している点が注目される。互助慣行それ自体は人間が共生する限り自然発生的に行われてきたものと思われる。大災害のとき国家間で支援するのは「地球家族」あるいは「地球村」の一員として自然な行為だが、金融互助など類似した互助慣行から「東南アジア的互助社会」を考える意味は政治や経済と異なる宗教や社会の互助ネットワークの存在を強調するためでもある。強制互助ではない共生互助は国益が関わりと難しいが、国政に左右されない民間団体の交流や支援事業など活動の余地はあるだろう。日本の高齢者介護や地域社会の取り組みなど互助慣行を活かした制度の移転で近隣諸国を支援することは支え合いの社会システムの共生移転と言える。もともと共同体は共有地 (コモンズ) に支えられてきたが、現在領土問題で難しいものの地球社会レベルで島嶼地域を共有地として共同開発し、それを「モヤイ島」として共同管理することで関係国にその利用権が付与される場合もあるだろう。また各国が資金を出して順番に必要な国が入札してそれを使えるようにする金融互助と同じ仕組みの「国際モヤイ基金」も考えられる。こうした「東南アジア共同体」は各国の互助慣行の再認識と近隣諸国間の互助ネットワークに基づく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 26 (1)
2. 論文標題 東アジアの互助社会 日本と韓国、中国、台湾との互助ネットワークの比較	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 61 - 97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 27 (1)
2. 論文標題 フィリピンの互助慣行 日本との民俗社会学的比較	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 1 - 32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 27(2)
2. 論文標題 東アジアにおける互助慣行としての小口金融	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 インドネシアの互助慣行 日本との民俗社会学的比較	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 1 - 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 28(2)
2. 論文標題 Micro Finance in Traditional Mutual Help Networks in East Asia: A Comparison of Rotating Savings and Credit Associations in Japan, South Korea, China, and Taiwan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 第267巻第4号
2. 論文標題 伝統的な互助慣行からみた地域社会のケアシステム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 週刊『医学のあゆみ』	6. 最初と最後の頁 311 - 316
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 29(1)
2. 論文標題 タイの互助慣行 日本との民俗社会学的比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 1 - 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 南インドの互助慣行 カルナータカ州ウドッピ県を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 51 - 69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 30(1)
2. 論文標題 南洋群島の互助慣行 パラオとボンペイを中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 1 - 27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 30(2)
2. 論文標題 東南アジアにおける金融互助 日本とフィリピン、インドネシア、タイとの比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 13 - 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 42
2. 論文標題 日本と東南アジアの互助慣行の比較 金融互助における絆	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 経済社会学会年報	6. 最初と最後の頁 37 - 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 31(1)
2. 論文標題 マレーシアの互助慣行 日本との民俗社会学的比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 29 - 49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 恩田守雄	4. 巻 31(2)
2. 論文標題 東マレーシアの互助慣行 ボルネオ島サバ州サラワク州のオンライン・インタビュー調査を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学部論叢	6. 最初と最後の頁 17 - 33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Morio Onda	4. 巻 Volume 18 Part1
2. 論文標題 Rotating savings and credit associations as traditional mutual help networks in East Asia	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Asian Studies (Cambridge University Press)	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S1479591421000036	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 恩田守雄
2. 発表標題 東アジアの互助慣行 日本と韓国、中国、台湾との比較
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Morio Onda
2. 発表標題 Rebuilding Communities Following the Great East Japan Disaster: Restoration of Ties among the Victims
3. 学会等名 Third ISA (International Sociological Association) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 恩田守雄
2. 発表標題 日本とフィリピンの互助慣行の比較
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 恩田守雄
2. 発表標題 互助慣行としての東アジアの小口金融 日本と韓国、中国、台湾との比較
3. 学会等名 経済社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 恩田守雄
2. 発表標題 日本とインドネシアの互助慣行の比較 東ジャワとバリ島を中心に
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 恩田守雄
2. 発表標題 日本とタイの互助慣行の比較 東北部と北部の農山村を中心に
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morio Onda
2. 発表標題 Micro Finance in Traditional Mutual Help Networks in East Asia: A Comparison of Rotating Savings and Credit Associations in Japan, South Korea, China, and Taiwan
3. 学会等名 XIX ISA(International Sociological Association)World Congress of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 恩田守雄
2. 発表標題 日本と南洋群島の互助慣行の比較 パラオとボンペイを中心に
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 恩田守雄
2. 発表標題 日本とマレーシアの互助慣行の比較 ムラカ州の農漁村を中心に
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 恩田守雄
2. 発表標題 日本とマレーシアの金融互助の比較
3. 学会等名 経済社会学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 恩田守雄	4. 発行年 2016年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 342頁
3. 書名 医学生のための社会学入門	

1. 著者名 恩田守雄	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 368頁
3. 書名 支え合いの社会システム 東アジアの互助慣行から考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------